知ったかぶり

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
知ったかぶり

【Ｎコード】
Ｎ２２３６Ｓ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
その芸術家は美食にかこつけてやりたい放題の限りを尽くしていた。しかし最後にはその報いを受けて。ある漫画の登場人物とは一応無関係です。

第一章

知ったかぶり

山原雌山という男がいた。

職業は一応芸術家となっている。絵画や陶芸、書道で有名とされている。しかし実際はそれよりもであった。食に関する発言や行動の方が有名だった。

何かにつけて上から目線で怒鳴り散らし食事が少しでも気に入らないと暴れ回る男だった。そのことで有名になっていたのである。

そんな彼の特徴としてだ。やたらと知識をひけらかすというものがあった。

「河豚はだ」

「はい、河豚は」

「どうなのでしょうか」

「やはり大阪だ」

周りの者にこう言うのだった。所謂取り巻き達である。

「東京のものはまずくて食べるに値しない」

「そうなのですか」

「そこまで酷いのですか、東京の河豚は」

「まず素材がなっていない」

つまり河豚自体がだというのだ。

「河豚が何なのかもわかっていないのだ」

「そこからして駄目だと」

「そう仰るのですね」

「如何にも。だしの取り方も駄目だしな。それに対してだ」

見事な和服を着てその和服の下で腕を組んでの言葉だった。丁寧にセットした髪に厳しい顔をしている。部屋は檜と畳の和室だ。そこで正座をして取り巻き達に話しているのだ。

「大阪のだしは違う」

「上方ですね」
「そのだしがいいと」
「そうだ、昆布を上手に使っている」
言うのはこれだった。
「鰹節もな。東京のものはただひたすら辛いだけだ」
「水も悪いですよね」
「醤油も」
「だから余計に駄目なのだ。東京は江戸の頃からそうだ」
こう何かの本で得た知識を話していく。
「全く以って。東京の河豚は駄目だ」
「それよりも大阪ですね」
「やはり」
「河豚は大阪だ」
それは絶対だというのだ。
「そしてすっぽんはだ」
「それは京都ですね」
「そちらですね」
「その通りだ。食は上方にあり」
こう断言もしてみせる。
「東京になぞない」
「ええ、それじゃあ先生」
「今宵はどちらに」
「フレンチだ」
それだというのだ。彼の贅沢は和食だけに止まらないのだ。
そして銀座の高級レストランに入るのだった。白い宮殿を思わせる内装に絹のカーテンや見事なテーブルが置かれている。そこに入ってだった。
ディナーを食べる。しかしここでだった。
不意に血相を変えてだ。怒鳴り出したのだ。
「シェフを呼べ！」

「！？一体何が」
「何があったのですか？」
「この肉を焼いたシェフを呼べ！」
驚いて飛んで来た店の者達にこう怒鳴るのである。
「今すぐにだ。この鴨肉は何だ！」
「そ、その鴨がですか」
「一体どうされたのですか」
「いいから呼べ！」
何と立ち上がってだ。店の者の一人の胸倉を掴んで言うのだった。
「いいな、すぐにだ！」
「は、はい！」
「それでは」
こうしてだった。すぐにシェフが山原のところに来た。そのシェフに対してだ。
山原は皿ごとその肉を持ってだ。シェフに投げつけた。肉とソースがその胸に当たり料理人のその白い服を汚したのだった。
そうしてだ。山原はさらに言うのだった。
「貴様、何だこの焼き方は！」
「な、何か不都合でも」
「炭で焼いていないな！そうだな！」
「はい、コークスですが」
「何故急に変えた！」
怒っているのはそれが原因だった。
「どういう了見だ！言え！」
「それはですが」
それについてだ。シェフは話をはじめた。理由は炭の匂いが肉に付いてそれで風味を微妙に害するからだ。それでコークスにしたのである。

第二章

そのことを話す。しかしだった。山原はまだ言うのだった。
「それを言わなかったからだ。まずかったぞ」
「す、すいません」
「このことは他の方々にも言っておく」
項垂れるシェフに対してさらに言う。
「いいな、それはだ」
「あ、あの山原様」
「それは」
「止めて頂きたいのですが」
「それならだ」
山原は狼狽しだした店の者達に対して言うのだった。
「誠意を見せてもらおうか」
「誠意ですか」
「それをなのですね」
「そうだ、見せろ」
居丈高に言う。
「今すぐにだ。店の誠意を見せろ」
「わかりました」
「それなら」
「オーナーを呼べ！」
店の者達にまた話した。
「そしてわしに謝罪しろ。いいな！」
こうしてだった。他の客の料理を作っていたり接客をしているのを止めさせてそのうえでだった。店の者全員を集めて店の前、往来にて彼に土下座をさせたのである。
そのうえ金まで取った。二百万だ。そのうえで立ち去るのだった。
こうした男だった。だが彼はマスコミや政界に顔が利きそのせい

で誰も逆らうことはできなかった。彼はまさにやりたい放題だった。
その彼が贔屓にしている店があった。その店は。
大阪にあった。繁華街にある気位の高い料亭である。そこにいつも来てだった。
「いつもながら見事だな」
「御気に召されましたね」
「うむ」
立派な和服のおかみの応対を受けながら鷹揚に応えるのだった。
「見事な鮎だ。これは」
「無論天然ものです」
「そうだな。味がしっかりしている」
鮎の塩焼きを食べながらの話だった。
「そして野菜もだ」
「新鮮な京野菜です」
「いつものだな」
「はい、素材は厳選していますので」
「いつも通り見事だ」
それを聞いてだ。彼はまた言うのだった。
「飯にしてもだ」
「そちらはコシヒカリの最上級ですので」
「米だ」
彼はそれについても言うのだった。
「米は食の基本だ」
「その通りです。ですからそれは一粒一粒厳選していますので」
「おかみ」
山原はおかみに対して述べる。
「今日のことはだ」
「はい」
「先生方にも話しておく」
こう告げるのだった。

「そしてだ」
「はい、そしてですね」
「知り合いの編集長にも話しておく」
美食雑誌の編集長にというのだ。そこで話してだった。
「見事だった」
「有り難うございます」
「うむ。そして最後は」
「西瓜を用意してあります」
「それもだな」
「ご堪能を」
こんなやり取りをしながら食事を楽しむのだった。実際に彼はこの日のことを政治家や企業家、そして雑誌の編集長に話したのだった。彼等はその話を聞いてその料亭に行き来する。それは山原にとっていいことであった。
「先生、御礼のものが届いています」
「それも幾つか」
「そうか」
己の部屋でだ。書を書きながら鷹揚に応えるのだった。
「誰からだ」
「民捨党の大沢元幹事長からです」
「それと捏造ステーションの古屋キャスターからもです」
「わかった。中身は確かめたか」
「どちらも現金です」
「百万ずつです」
「謝礼だな」
それを聞いてだった。山原はまた鷹揚に応えたのだった。
「わかった。ではその金はだ」
「いつも通りですね」
「そうされますね」
「そうだ、口座に入れておけ」

銀行の彼の口座にというのだ。

第三章

「わかったな」
「はい、それではすぐに」
「そうしておきます」
「ではだ。今日はだ」
何を食べるか、その話だった。
「大内に言え。鳥にせよとな」
「鳥ですか」
「それですね」
「青鷺にせよ」
その鳥だというのである。
「わかったな。ではだ」
「はい、では大内さんにです」
「お話しておきます」
この日も豪奢な美食を楽しむのであった。ところがだった。
ある日だ。その大阪の繁華街の料亭でだ。こんな話が出て来たのだった。
「えっ、あそこの料理ってそうなのか？」
「どうやらそうらしい」
「鮎は養殖ものでな」
「野菜は使い回しでな」
「しかも米だって二級米らしいぞ」
「それを最高級って言ってたのか」
このことがだ。ネットで話題になったのだった。
「それって詐欺だろ」
「なあ」
「そんな商売普通の食堂でもしないぞ」
「ああ、全くだ」

「洒落にならないだろ」
そしてこうも話されるのだった。
「食い物扱う人間がやったらいけないことだろ」
「そんな店行けるか」
「ふざけるな」
「お高く止まりやがってよ」
店の評判は暴落した。次から次に不祥事が出てマスコミにも叩かれてだった。遂にこの店は閉店に追い込まれたのだった。
そしてだ。その店を有力者に紹介した山原もだった。
政界やマスコミの有力者達は彼等を信用しなくなった。彼の評判も落ちたのだ。
謝礼は減りだ。次第に寂しい状況となってきていた。
しかし彼の傲慢は変わらない。まだこう言っていた。
「今日はだ」
「はい」
「店に行かれますか」
「中華だな」
そこにだというのだった。
「そこに行こう」
「わかりました」
「車を出せ」
弟子に運転させそのうえでだった。彼はその中華の店に向かう。だがその途中だった。彼の乗るリムジンが渋滞に巻き込まれたのだった。
「何だ、これは」
「渋滞です」
「それは見ただけでわかる」
後部座席で忌々しげな顔をして弟子に返す。リムジンの中は豪奢そのものでありそこにいるだけで生活ができそうな程だった。
「それはだ」

「では一体」
「全く。愚民達が」
周りに対する言葉だった。
「好き勝手に車を運転するからそうなるのだ」
「左様ですか」
「全く。わしを誰だと思っている」
今度はこんなことを言うのだった。
「全くな」
「しかし今はです」
「ふん、急げよ」
無茶を言ってだった。彼は渋滞の中にいたのだった。そうして店に行くとだった。
客達がだ。山原の姿を見て囁くのだった。
「あの人がだよなあ」
「ああ、政治家とかマスコミの有力者にあの店のことを紹介していたらしいな」
「どうやらな」
「あの人だったんだな」
「おい、知ってるか？」
そしてだ。誰かが言うのだった。

第四章

「あの人な」
「ああ」
「何かやったのか」
「金貰ってるらしいぞ」
「金って！？」
この話になるとだ。何人かが気色ばんだ。
「金ってどういうことだ？」
「あいつ何かやったのか？」
「金って何なんだよ」
「何でもな」
それでだった。このことが話されたのだった。
「美味い店を紹介してな」
「それで？」
「紹介して？」
「謝礼として政治家やニュースキャスターから金を貰ってたんだよ」
「何っ、あんなに高潔ぶっていてもか？」
「そんな総会屋みたいなことしてたのか」
「そんなことしていたのか」
「とんでもない奴だな」
それでだった。山原を難しい顔で見るのだった。
そのうえでだ。彼を見るのだった。
「何かいかがわしい奴だな」
「そんなことしていたのか」
「正体はそんな奴だったのか」
「品性が見えてきたな」
こうした話が出て来てだった。しかもだ。
その潰れた料亭の話がだ。出て来たのだった。

「あいつあの店かなり絶賛していたよな」
「ああ、してたよ」
「もう持ち上げるなんてものじゃなくてな」
「そんなことしてたよな」
こうした話になってだった。そのうえでだ。
山原の評判は落ちていった。美食家ぶっているが実は味がわからないのではないかとだ。そんな風に見られだしたのであった。
そうしてだ。その結果だ。
これまで親しく彼にアドバイスを受けてきた著名人や有力者達がだ。彼から離れていった。そしてそれに伴う人脈も権勢もだ。翳ってきたのだった。
翳ってからだ。それからだった。
弟子達もだった。彼等もだった。
「では私はこれで」
「私もです」
「それでは」
こう山原に話してだった。彼の前から去ろうとするのだった。
山原はその彼にだ。言うのだった。
「わしを見限ったというのか」
「それは」
「その、あの」
「ふん、顔を見てわかるわ」
山原は厳しい顔で彼に告げた。
「それでな」
「・・・・・・・・・」
「好きにしろ」
そしてこう告げたのだった。
「御前達のな」
「はい、では」
「そうさせてもらいます」

一人減り二人減りだった。やがて弟子は一人もいなくなった。
彼の厨房もだ。気付けば殆どいなくなっていた。家族のない彼は孤独になろうとしていた。そして遂にであった。
最後に一人残った若い男がだ。こう彼に言うのだった。
「あの」
「あの？」
「はい、料理を見て頂きたいのですが」
こう山原に言ってきたのである。

第五章

「宜しいでしょうか」
「うむ。どんな料理だ」
「はい、鶏を使ってきました」
そうした料理だというのだ。
「それを召し上がって頂きたいのですが」
「鶏か」
それを聞いてだ。山原は考える顔になった。
そしてそのうえでだった。こう彼に言うのであった。
「いいだろう。それではな」
「簡単な料理ですが」
「よい、それで何を作ったのは」
「かやく御飯です」
それだというのだった。
「それを作りました」
「そうか、かやく御飯か」
「それで宜しいでしょうか」
「構わん。それではな」
「はい、それでは」
こうしてであった。そのかやく御飯が彼の前に出された。見事な黒い箸と茶碗は山原が作ったものである。その中にそれはあった。
そしてだ。彼はその茶碗を手に取りそうして橋で飯を取りだった。口に入れるのだった。
そうして一口また一口と食べていく。するとだった。
山原の前に控えている料理人がだ。彼に問うてきたのだった。
「如何でしょうか」
「見事だ」
鷹揚に答える山原だった。一旦茶碗を置き箸もそうしてから述べ

た。
「まず飯だが」
「はい」
「ササニシキだな」
それだというのだった。
「かやく御飯は飯が固めがいいがそうしているな」
「はい、その通りですね」
「そのササニシキの素材を殺さずに見事に炊いている。それにだ」
彼は言葉を続ける。
「醤油もいい。じっくりと寝かしたしっかりとしたものだったな」
「・・・・・・・・・・」
彼は喋らない。山原はそれに構わず言っていく。
「野菜も無農薬のそれを選んだな。それに肝心の鶏だが」
「はい、それは」
「名古屋のものだな」
こう言った。
「名古屋コーチン、そこから厳選して選んだか。それだけの味だな」
「いえ」
「いえとは」
「この鶏はです」
彼は山原に対して言うのだった。
「ブロイラーです」
「何っ！？」
「スーパーで買ったブロイラーです。それです」
「まさか」
「そして米は古古米です」
それだというのだ。

第六章

「タイ米を使いました」
「馬鹿な、かやく御飯にタイ米だと」
「野菜もスーパーで買ったものです」
「まさか。それは」
「そしてです」
さらに話していく彼だった。
「醤油は大企業の大量生産のものを」
「そんな筈がない」
「いえ、そうです」
だが彼は山原に言うのだった。
「何でしたらレシートをお見せしましょうか」
「レシートだと」
「そして」
さらにであった。彼はまた言ってきた。
「これでわかりました」
「何がわかったというのだ」
「先生がです」
他ならぬ山原がだというのだった。
「先生がわかりました」
「どういう意味だ、それは」
「先生は美食家であられますね」
「無論だ」
「そして食通だと」
「私程の者はおらん」
断言だった。その自信があった。揺ぎ無いまでのものがだ。
「この世にな」
「そう思われていましたが」

「どうだというのだ」
「それは違いました。貴方はです」
どうかというのであった。
「御自身でそう思われているだけで」
「違うというのか」
「本物ではありません」
そしてだ。彼は言った。山原に対して。
「知ったかぶりをさせているだけです」
「私を侮辱するか」
「侮辱ではありません」
「では何だ」
「事実を申し上げただけです」
これが彼の言葉だった。
「貴方は所詮は。その程度の方です」
「おのれ・・・・・私に逆らうとだ」
山原はだ。本性を出してきて彼に言ってきたのだった。
「どうなるかわかっているのか」
「さて。どうなるでしょうか」
「この国でだ。まともな店にいることはできんぞ」
「そうであればいいですがね」
「私を侮るか」
「ですから事実を申し上げているだけです」
彼は引かない。そしてであった。
彼からだ。山原に告げた。
「私もこれで、です」
「どうするつもりだ。言っておくがだ」
「おいとまさせて頂きます」
彼が言うより先にであった。自分から告げたのだった。
「最早これで」
「本気だな」

「はい。私は本物の味がわかる方の為に料理を作らさせて頂きます」
これが彼の信念だった。一歩も引かないものであった。
「ですから。これで」
こうしてだった。最後の料理人も山原の前から去った。以後彼は何の力も失い芸術家としての名声も振るわなくなり孤独に終わった。屋敷も何もかもが寂れその死は実に惨めなものだったという。
これが山原雌山という男だった。後世に彼を美食家と言う者はいない。知ったかぶりをしていた傲慢な権力主義者、これが彼への評価だった。その作品も言葉も何もかもが否定されるだけであった。それが彼であった。

知ったかぶり　　完

２０１０・１２・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2236s/

知ったかぶり

2011年4月4日22時40分発行